



発芽した育苗箱を手分けして綺麗に並べました。

笑顔の大豊作を期待して

営農部

高齢化や人手不足で播種作業が出来なくなった生産者や、播種機を所有しない生産者などから注文を受けた、育苗箱およそ1万7千枚分の水稻播種作業が4月3日から一か月間8回に分けて行われました。

播種作業は全自動播種機で、3月に発芽を促す浸種作業を終えた種もみを播き、土をかぶせ室温30度程に保った発芽室で2日間ほど保管し発芽させたあと、隣接する水稻育苗ハウスに担当職員が総出で綺麗に並べました。

作業を指揮した小山能代営農センター長補佐は「均一された健苗供給を常に意識し作業した。供給後は適正な栽培管理をしてもらい、出来秋に生産者のたくさんの笑顔を見るのが楽しみだ。」と話してくれました。



播種後の育苗箱を発芽室へ運ぶ職員



手際よく播種作業

営農指導員が認識共有図る

“JAの顔” 営農指導員

4月21日に県農業振興普及課職員を講師に迎え4月22日から30日まで管内各所で行われる水稻育苗現地指導巡回で、生産者へ注意喚起する点など適正管理指導に向けた情報共有を目的に事前研修会を開催しました。

講師からは「育苗作業終了後のビニールハウスの活用について他作物を作付けする際には残留農薬基準を順守するため、育苗期に使用した農薬が土壌に接触・浸透しないよう注意喚起してもらいたい。」などといった指導を受けました。

座学終了後には生産者の育苗ハウスに出向き生育状況を確認するなど翌日から始まる指導巡回に万全を期しました。



生産者の育苗ハウスお借りして生育状況を把握



無人の育苗ハウスを換気し、生産者へ連絡



生産者の不安を解消する営農指導員

水稻育苗ハウス内の苗を訪問診断+

営農指導員

営農指導員が手分けして管内の育苗ハウスを訪れ、県農業振興普及課が発行する「あぜ道～稲作管理情報～」を手渡ししながら苗の状態など確認しながら苗代巡回を行いました。

農繁期に突入していることもあり、立ち会えない生産者のハウス内の温度が高ければ換気したことを本人へ電話連絡や置手紙をするなどして今後の注意を促していました。

「苗の状態はどうか？まだ、かん水したらよいか？」などの問いに、「苗の状態は順調ですよ。かん水は早朝を基本に回数は少なくね」などとアドバイス。

生産者の不安が解消され笑顔で作業に戻る光景に、営農指導員が町のお医者さんのように見えました。

